

(29) H32号住居址

奈良時代

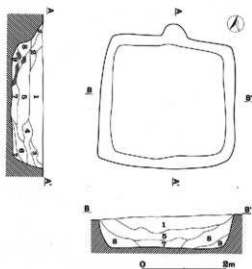
H32号住居址は、第Ⅰ区Lえ10グリッドより検出された。西南隅は自然流路（M9号溝状道構）の堆積後に掘り込まれている。

平面形態は、南北3.2m、東西3.2mの隅丸方形を呈する。床面積は7.1m²を測る。主軸方向はN-8°-Wを指す。壁の立ち上がりは内湾し、110度の急傾斜をなす。確認面からの壁高は、67~81cmである。

本住居址は、以上の規模の掘り方と北壁中央に半円形状のカマド煙道部の掘り方がみられたが、床面の形成、カマドの構築などの住居建設に関わる基本的な一連の形跡が認められないことから、製作を途中で放棄し、埋め戻されたものと考えられる。

住居覆土は9層の細分で図示したが、基本的には、ローム（第Ⅴ層）と黒色土（第Ⅲ層）を用いた埋め戻しの過程を示す堆積である。

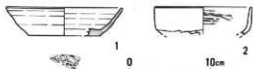
遺物は、1層から回転へら切りの須恵器杯（1）と礎を有する土師器杯（2）が出土しているが、以上の堆積の在り方から、本住居址製作時のものかどうかの判断は困難である。一応、時期の新しい須恵器杯をこの住居址製作時期を判断する資料とすれば、その特徴から、奈良時代前半、さらには八世紀第Ⅱ四半期が推定される。



第122図 H32号住居址実測図（1：80）



写真114 H32号住居址



第123図 H32号住居址出土土器（1：4）



写真115 H32号住居址出土遺物

表48 H32号住居址出土土器観察表

図面番号	種別	器形	法量	底径	成形	調査	色質	出土位置	備考
1	須恵器	杯	(14.2) (8.8) 3.5	口縁1/8 底面1/6	コタテ	・底面回転へら切り 外面：皮部ナゲ	内面：S Y 5/1 外面：S Y 5/1 断面：S Y 5/1	Ⅰ・Ⅱ区1層	火焼あり
2	土師器	杯	(12.0) (11.0) < 3.4)	口縁1/4	赤コタテ	内面：口縁コナゲ→へらミギヤ 外面：口縁コナゲ→底面へらミギヤ	内面：S Y R 5/4 外面：10 Y R 1.7/1 断面：7.5 Y R 5/3	Ⅱ区1層	

(30) H33号住居址

奈良時代

H33号住居址は、第1区Lい・う10、第1区Mい・う1グリッドより検出された。西南隅は自然流路（M9号溝状遺構）に掘り込まれている。

平面形態は、南北4.6m、東西4.2mの南北に長い隅丸方形を呈する。床面積は15.5㎡を測る。主軸方向はN-25°-Wを指す。

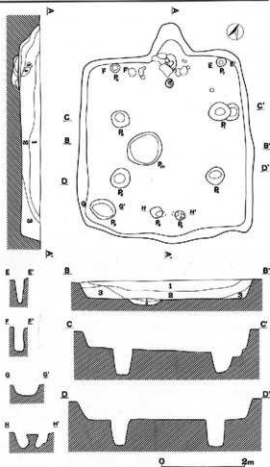
壁は110度前後の急傾斜で立ち上がり、確認面からの壁高は46~50cmを測る。周溝は確認されていない。

ピットは10個確認され、以下の在り方を示す。

主柱穴は、住居中央よりに4個（P1~P4）が規則的に配置されていた。P1は2度の掘り方からなり、新規の掘り方は44×54cm、深さ54cmを測る。P2は42×48cm、深さ64cm、P3は48×42cm、深さ62cm、P4は43×43cm、深さ65cmを測る。

南壁中央際では、向き合った状態で内植する2個の小ピット（P5・P6）が併設されていた。P5は27×32cm、深さ36cm、P6は22×32cm、深さ32cmを測る。

北壁に接した東西隅の対称的な位置に、小ピット2個（P7・P8）が設けられていた。この2



第124図 H33号住居址実測図（1：80）

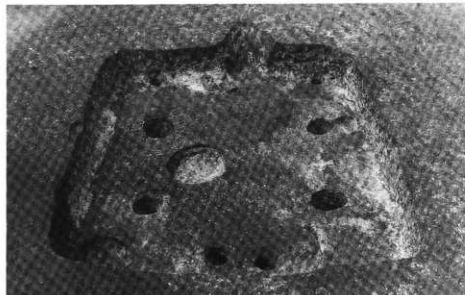
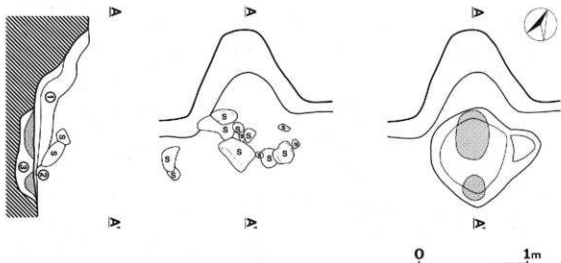


写真116
H33号住居址



第125図 H33号住居址カマド実測図(1:30)

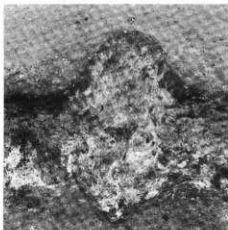
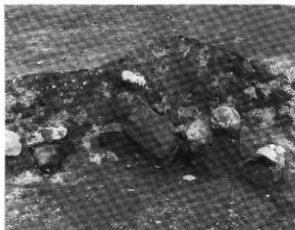


写真117 H33号住居址カマド

個の小ピットは、主柱穴と同一ライン上に位置するという配置性も示していた。P7は20×25cm、深さ57cm、P8は22×23cm、深さ59cmを測る。また、南東隅では、49×64cm、深さ26cmのP9が検出されている。

径80cm、深さ20cm程の皿状を呈するP10は、住居中央の床下に設けられていたピットである。ピット内からは、面取りされた軽石2個、土師器甕破片、白色粘土ブロックが検出されている。

住居覆土は、1層がバミス・ローム粒子を含む暗褐色土、2層がバミス・ローム粒子を多く含む黒褐色土、3層がバミス・ローム粒子を多く含む

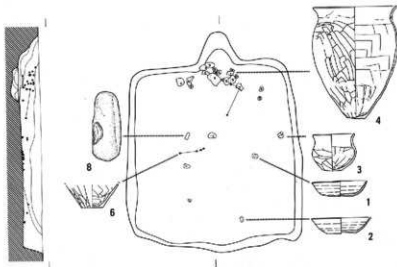
暗褐色土である。また、P10の覆土は褐色土であり、ロームが貼られて床面が形成されていた。

カマド

カマドは北壁中央部に構築されていたが、破壊され、構材の面取りされた軽石が、カマド内にまとめて廃棄されていた。

煙道部は舟先状に緩やかな傾斜で掘り込まれ、奥壁も同様に突出していた。火床面は円形に掘り込まれ、褐色土(③層)で埋め戻されていた。

覆土には、構材の2次堆積と考えられる褐色粘質土(①層)と灰黄褐色粘質土(②層)がみられた。



第126図 H33号住居址遺物分布図

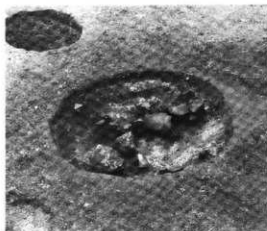


写真118 P10遺物出土状態

遺物

検出された主要遺物は、須恵器杯、土師器甕、敲石である。

1・2は、底部切り離し手法が回転糸切りであり、底部に調整が施されない須恵器杯である。1はP1とP2間の床面から、2はP6脇の床面から検出されている。

3は球形を呈する土師器小形甕である。P1南脇の床面から潰れた状態で検出されている。

4・5は口縁部が「コ」の字気味に外反し、最大径を胴部上半部に有する傾向を示す土師器長胴甕である。5はカマド内の①層から検出され、4



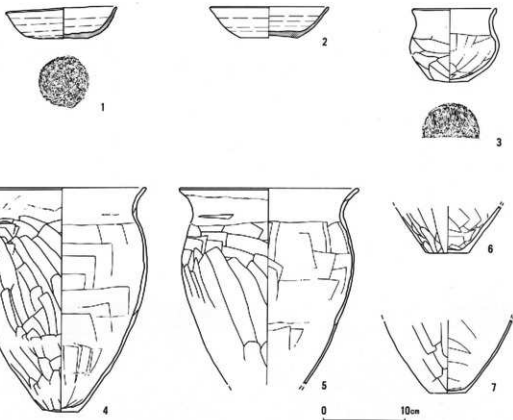
写真119 土器1出土状態

はカマド内の①・②層とカマド手前の2層に破片が分布していたものである。6・7は土師器長胴甕の底部で、7は1層中の遺物であり、6はP10内に廃棄されていたものである。

8はP2南脇の床面からやや浮いた状態で出土した敲石で、端部に敲打痕、側縁に剝離痕がある。

なお、本住居址に廃棄されていた須恵器甕破片とD2号土坑に廃棄されていた須恵器甕破片が接合している。

本住居址の土器群は、須恵器杯・土師器長胴甕の特徴と組成から、奈良時代後半・八世紀第Ⅳ半期～九世紀初等の土器様相と考えられよう。



第127図 H33号住居址出土土器(1:4)

表49 H33号住居址出土土器観察表

碎器番号	器名	器形	出土量	残存	成形	調査	整	色 調	出土位置	備考
1	深鉢器	杯	13.4 6.2 3.9	口縁1/4 底部完形	コタコ	→底面凹縁糸切り		内面: 10Y8/1 外面: 10Y8/1 断面: 10Y5/1	N区床室	火障あり
2	深鉢器	杯	(14.0) (7.0) 3.8	口縁1/5 底部1/2	コタコ	→底面凹縁糸切り		内面: 7.5Y8/1 外面: 7.5Y8/1 断面: 10Y8/1	N区床室	火障あり
3	土師器	壺	(10.3) 4.9 8.9	口縁1/3 底部完形	赤コタコ	内面: 口縁コナデ→胴部へ尻部ヘラナデ 外面: 口縁コナデ→胴部・底部ヘラナズリ		内面: 7.5Y R5/4 外面: 5 Y R5/6 断面: 7.5Y R5/4	I区床室	
4	土師器	壺	20.4 4.2 27.5	口縁完形 底部完形	赤コタコ	内面: 口縁コナデ→胴部へ尻部ヘラナデ 外面: 口縁コナデ→胴部・底部ヘラナズリ		内面: 2.5Y R7/6 外面: 2.5Y R6/6 断面: 2.5Y R7/6	カマド ①、②層 I区2層	
5	土師器	壺	(21.8) — (24.2)	口縁2/3	赤コタコ	内面: 口縁コナデ→胴部ヘラナデ 外面: 胴部ヘラナズリ→口縁コナデ		内面: 2.5Y R5/6 外面: 5 Y R5/8 断面: 2.5Y R7/6	カマド③層	
6	土師器	壺	(5.2) (3.8)	底縁2/3	赤コタコ	内面: ヘラナデ 外面: 胴部・底部ヘラナズリ		内面: 2.5Y R5/6 外面: 5 Y R3/1 断面: 5 Y R5/6	P10	
7	土師器	壺	(4.4) (0.0)	底縁4/5	赤コタコ	内面: ヘラナデ 外面: ヘラナズリ		内面: 7.5Y R4/2 外面: 7.5Y R5/2 断面: 7.5Y R7/4	I区1層	

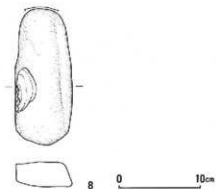


表50 H33号住居址出土石器觀察表

採掘番号	石種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
8	燧石	梁山岩	16.4	7.0	3.0	600	I区2層	西部に敲打痕 製造に割線あり

第128圖 H33号住居址出土石器（1：4）

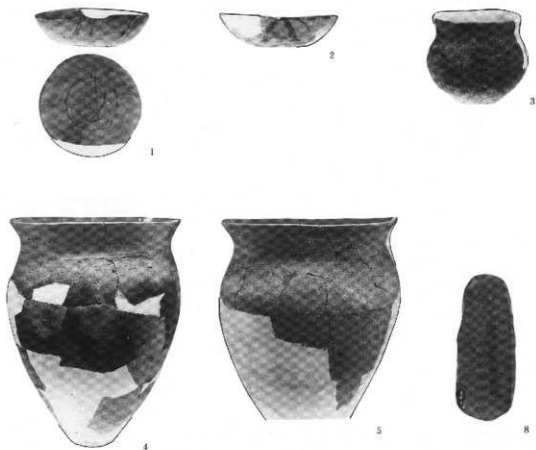


写真120 H33号住居址出土遺物

(31) H34号住居址

奈良時代

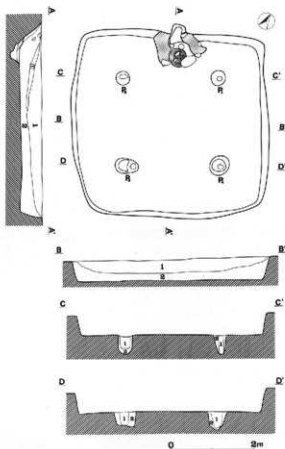
H34号住居址は、第Ⅰ区Hけ・こ1・2グリッドより検出された。西南隅は自然流路(M9号溝状遺構)に掘り込まれている。

平面形態は、南北4.5m、東西4.8mの隅丸方形を呈する。床面積は17.7㎡を測る。主軸方向はN-30°-Wを指す。

壁は100度の急傾斜で立ち上がり、確認面からの壁高は46~58cmである。周溝は確認されなかった。

主柱穴は、規則的に配置された4個(P1~P4)が検出された。P1は36×34cm、深さ46cm、P2は33×32cm、深さ45cm、P3は35×55cm、深さ38cm、P4は50×44cm、深さ46cmを測る。なお、径10~20cm程度の柱痕が確認されている。

住居覆土は2層からなる。1層は、バミス・ローム粒子を多く含む黒褐色土で、2層はバミス・ロームブロックを多量に含む暗褐色土である。なお、カマドから住居中央にかけての2層上面に、カマドの構材である灰白色粘土ブロック(①層)の分布がみられた。



第129図 H34号住居址実測図(1:80)

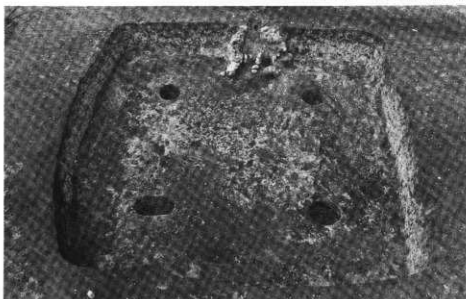
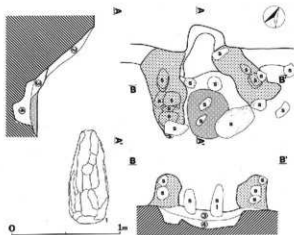


写真121
H34号住居址



第130図 H34号住居址カマド実測図(1:30)



写真122 H34号住居址カマド

カマド

カマドは北壁中央部に設けられていた。煙道部は、長方形の緩やかな掘り込みからなり、灰白色粘土と黒褐色土(②層)が貼られていた。袖部の在り方は、右袖部は崩れた状態であるが、左袖部では面取りした軽石を組み上げ、灰白色粘土で覆い固めた構築状況が比較的良好に残されていた。火床部は、円形に掘り窪められた後に、黒褐色土(③・④層)で埋め戻され、円柱状に加工された支脚石2個が設置されていた。なお、本住居址の覆土2層では、多量の軽石の分布が広範囲にみられ、特にカマド右脇での分布が顕著であった。カマド右脇の在り方は、カマドの破壊行為を示唆するものと考えられようか。

遺物

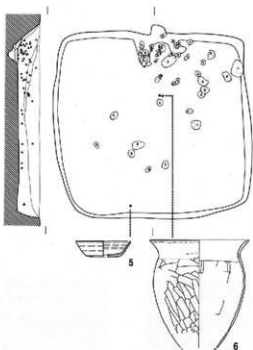
床面付近では良好な出土状況はなかったが、1層を主体に須恵器蓋・環、土師器甕が検出されている。

1~4は、1層から出土した須恵器蓋の破片で、1は環状のつまみ部、2はボタン状のつまみ部、4はかえりを有するものである。

5は、底部が回転ヘラ切りによって切り離された須恵器環で、南壁際の2層から出土している。

6は「く」の字状口縁の土師器長胴甕で、カマド手前の粘土分布の上層から出土したものである。

須恵器環、土師器長胴甕は、その特徴から、奈良時代前半、さらには八世紀第Ⅱ四半期の土器と考えられようか。



第131図 H34号住居址遺物分布図

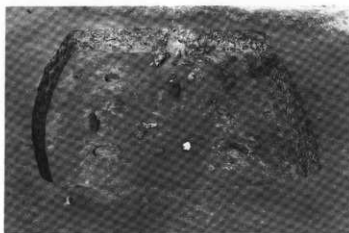
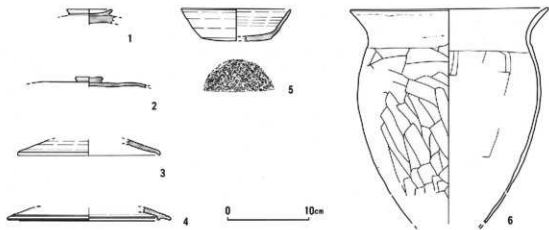


写真123 H34号住居址遺物出土状態



写真124 土器5の出土状態



第132図 H34号住居址出土土器（1：4）

表51 H34号住居址出土土器観察表

発掘番号	種別	器形	重量	残存	形状	調査	色調	出土位置	備考
1	須臾部	蓋	5.6 (1.7)	つまみ 完形	ワタコ	→つまみ貼付 内面：天井部ナデ	内面：10Y R7/2 外面：5 Y 5/1 断面：7.5 Y R6/4	Ⅱ区1層	
2	須臾部	蓋	3.4 (1.2)	つまみ 完形	ワタコ	→つまみ貼付 外面：天井部回転ヘラナズリ	内面：5 Y 5/1 外面：5 Y 5/1 断面：5 Y 5/1	Ⅰ・Ⅱ区1層	
3	須臾部	蓋	(17.4) — (1.9)	口縁1/2	ワタコ		内面：10Y R7/2 外面：2.5 Y 5/1 断面：7.5 Y R6/4	Ⅱ区1層	
4	須臾部	蓋	20.0 — (1.6)	口縁1/2	ワタコ	外面：天井部に沈線を施す	内面：2.5 Y 7/2 外面：5 Y 6/1 断面：7.5 Y R6/3	Ⅱ・Ⅲ区1層	
5	須臾部	杯	(13.4) (8.6) 3.9	口縁へ 底面1/2	ワタコ	→底面回転ヘラ切り 外面：盛務ナデ	内面：7.5 Y 6/1 外面：7.5 Y 6/1 断面：7.5 Y 6/1	Ⅱ区2層	
6	土器部	甕	(24.0) — (26.3)	口縁1/2	赤ワタコ	内面：同部ヘラナデ→口縁コナデ 外面：同部ヘラナズリ→口縁コナデ	内面：5 Y R2/1 外面：5 Y R6/4 断面：5 Y R6/4	Ⅰ区1層	

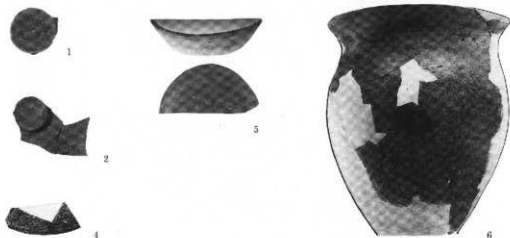


写真125 H34号住居址出土遺物

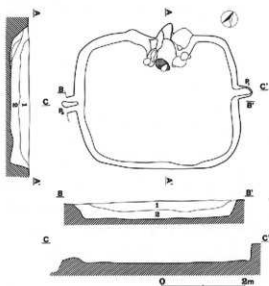
H35号住居址は、第1区Mあ3・4グリッドより検出された。H36号住居址によって西壁のP2上部が切られている。またカマドの一部が攪乱坑で破壊されている。

本住居址は小形の住居址であり、平面形態は、南北3.3m、東西3.9mの東西に長い隅丸方形を呈する。床面積は9.6㎡を測る。主軸方向はN-30°-Wを指す。

壁は105度程の急傾斜で立ち上がり、確認面からの壁高は36~45cmを測る。周溝は確認されなかった。

主柱穴は、東西壁中央部の対称的な位置に掘り込まれた2個（P1・P2）で構成されていた。P1は30×47cm、深さ40cm、P2は37×60cm、深さ32cm程度を測る。

住居覆土は2層に分層された。1層は、パミス・ローム粒子を含む黒褐色土であり、2層はパミス・ローム粒子を多く含む暗褐色土であった。



第133図 H35号住居址実測図（1：80）



写真128 H35号住居址

カマド

カマドは北壁中央部に設けられていたが、破壊された状態を示していた。

煙道部は、長方形の緩やかな掘り込みからなり、袖部は、地山を馬蹄形状に掘り残し、先端にピットが掘り込まれていた。右袖部では、そのピットに軽石が埋め込まれた状態で遺存していた。また、芯材として組み上げられていたと考えられる軽石が、カマド手前の2層中に分布していた。覆土には、構材と考えられる褐色粘質土(①層)と暗褐色土(②層)の堆積がみられた。

遺物

本住居址から検出された主要遺物は、須恵器 杯・壺・甕、土師器 杯・甕である。

1は底部が回転ヘラ切りによって切り離された須恵器杯で、出土層位は1層である。2は回転糸切りの後、底部外周に手持ちヘラケズリが施された須恵器杯で、Ⅲ区1層とⅢ区2層から破片で出土したものである。3は、底部に手持ちヘラケズリが施されている盤状の須恵器杯で、Ⅲ区2層から出土したものである。

4は須恵器壺底部と考えられるもので、Ⅲ区1層の出土である。

5の須恵器甕は、1～Ⅲ区1層に破片が分布していたものである。

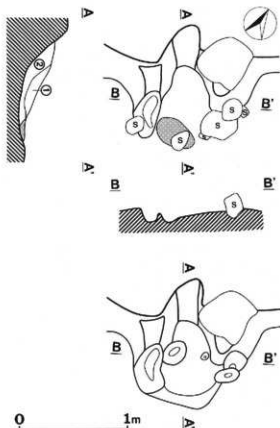
6・7は土師器杯で、6はロクロ成形で内面には黒色処理が施されている。7には畿内系暗文がみられる。6はⅡ区1層から、7はⅡ区2層から出土したものである。

8は土師器小形甕の口縁部破片で、Ⅲ区床面から出土している。

9は土師器長胴甕で、カマド手前の2層中に分布していたものである。

10はロクロ成形による土師器長胴甕で、1～Ⅱ区1層に破片が分布していたものである。

本住居址の土器群は、奈良時代後半・8世紀第Ⅲ四半期の土器様相と考えられようか。



第134図 H35号住居址カマド実測図(1:30)

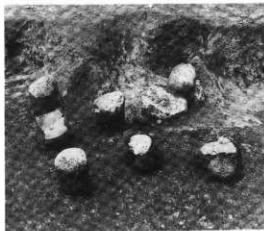
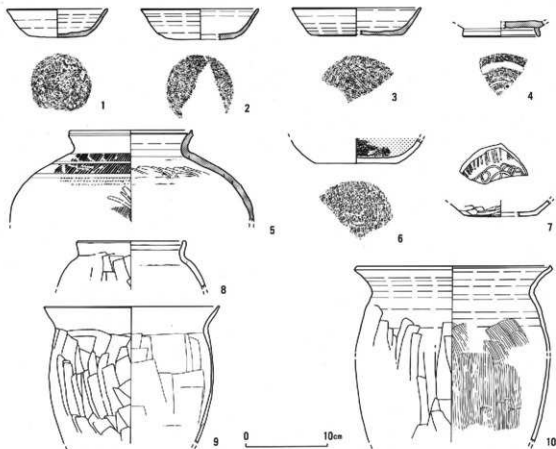


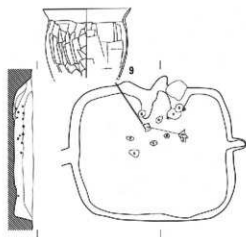
写真127 H35号住居址カマド



第135図 H35号住居址出土土器(1:4)

表52 H35号住居址出土土器観察表

調査番号	器名	器形	法量	残存	成 形	調	整	色 調	出土位置	備 考
1	須出器	杯	(12.4) 7.0 3.4	口縁1/4 底面2/3	コナコ	→底面回転ヘラ切り 外面: 底面ナゲ		内面: 5Y 6/1 外面: 5Y 6/1 断面: 5Y 6/1	Ⅱ区1層	火葬あり
2	須出器	杯	(14.4) (8.4) 3.7	口縁1/2 底面3/4	コナコ	→底面回転糸切り 外面: 底面外周手持ちヘラケズリ		内面: 5Y 8/4/1 外面: 5Y 8/4/1 断面: 5Y 8/4/1	Ⅱ区1層 Ⅱ区2層	火葬あり
3	須出器	杯	(15.8) (11.1) 3.4	口縁1/8 底面1/4	コナコ	→底面切り磨し(切り磨し方不明) 外面: 底面手持ちヘラケズリ		内面: 7.5Y 5/1 外面: 7.5Y 5/1 断面: 7.5Y 5/1	Ⅱ区2層	火葬あり
4	須出器	壺	— (9.4) (1.9)	底面1/4	コナコ	→底面回転ヘラ切り→高台製作		内面: N 8/0 外面: N 8/0 断面: N 8/0	Ⅱ区1層	
5	須出器	壺	(15.0) (11.1) (11.1)	口縁1/4	コナコ	内面: 胴部ナゲ・口脣部に辻織を施す 外面: 胴部叩き目・コナナゲ		内面: N 3/0 外面: N 3/0 断面: N 3/0	Ⅰ～Ⅱ区1層	
6	土師器	杯	(10.0) (3.0)	底面1/4	コナコ	→底面切り磨し(切り磨し方不明) 内面: ヘラミヤギ→黒色処理 外面: 底面手持ちヘラケズリ		外面: 5Y 3R/6 断面: 7.5Y R/7/4	Ⅱ区1層	
7	土師器	杯	8.8 (2.0)	底面1/4	赤コナコ	内面: ナゲ→叩立(体部に放射状彫文・底面にらやん状彫文) 外面: ヘラケズリ・ナゲ		内面: 7.5Y 3R/4 外面: 7.5Y 3R/4 断面: 7.5Y 3R/4	Ⅱ区2層	鏡内系 彫文
8	土師器	壺	(13.3) — (6.0)	口縁1/8	赤コナコ	内面: 胴部ナゲ→口縁コナナゲ 外面: 口縁コナナゲ→胴部ヘラケズリ		内面: 5Y 3R/4 外面: 7.5Y 3R/4 断面: 5Y 3R/4	Ⅱ区底面	
9	土師器	壺	(21.2) — (16.5)	口縁2/3	赤コナコ	内面: 口縁コナナゲ・胴部ヘラナゲ 外面: 口縁コナナゲ・胴部ヘラケズリ		内面: 2.5Y 3R/4 外面: 2.5Y 3R/4 断面: 2.5Y 3R/6	Ⅰ・Ⅱ区2層	
10	土師器	壺	(23.8) — (21.5)	口縁1/2	コナコ	内面: 胴部ナゲ(裏毛次工具) 外面: 胴部ヘラケズリ		内面: 7.5Y R/6/4/1 外面: 7.5Y R/6/4/1 断面: 7.5Y R/6/4/1	Ⅰ～Ⅱ区1層	



第136图 H35号住居址遗物分布图

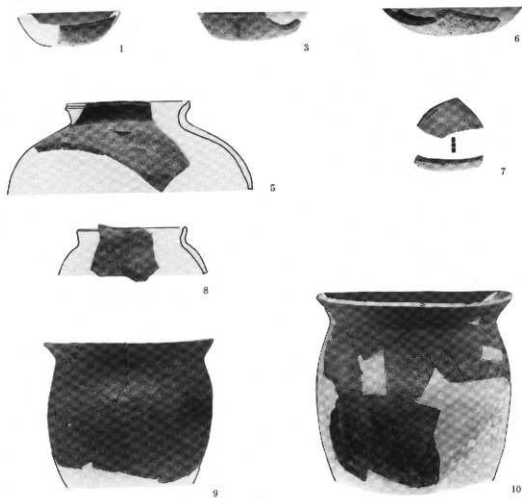


写真128 H35号住居址出土遗物

H36号住居址は、第1区Mい4・5グリッドより検出された。

平面形態は、南北4.7m、東西4.7mの整った隅丸方形を呈する。床面積は16.1㎡を測る。主軸方向はN-27°-Wを指す。

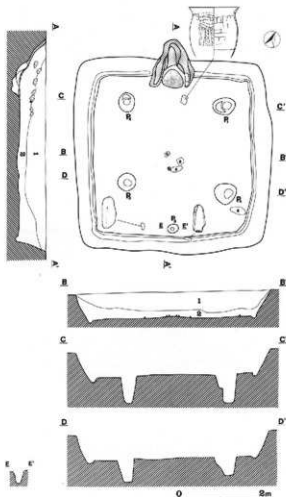
壁は115度程度の緩傾斜で立ち上がり、確認面からの壁高は62~76cmを測る。壁直下に幅8~18cm、深さ3~15cmの周溝が全周する。

主柱穴は、4個（P1~P4）が確認され、やや壁よりに規則的に配置されていた。掘り方は円形ないし楕円形で、P1とP2は2段の掘り込みである。P1は41×53cm、深さ70cm、P2は47×40cm、深さ64cm、P3は45×45cm、深さ56cm、P4は50×52cm、深さ44cmを測る。

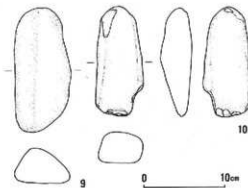
南壁中央部では、出入口関連のピットと思われる小ピット1個（P5）が検出されている。P5は22×26cm、深さ30cmを測る。

住居覆土は2層の堆積からなっていた。

1層は、バミス・ロームブロックを多量に含む暗褐色土であり、2層は、バミス・ロームブロックを多く含む黒褐色土である。なお、カマド前面では、2層の上面にカマドの構材であったと考えられる灰白色粘土ブロックの集中的な分布がみられた。



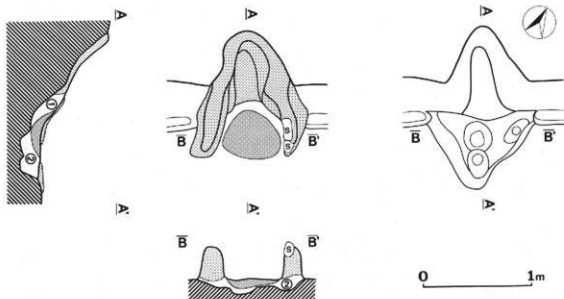
第137図 H36号住居址実測図（1：80）



第138図 H36号住居址出土石器（1：4）

表53 H36号住居址出土石器観察表

検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
9	磨石	角閃石 安山岩	15.4	7.0	4.3	600	Ⅱ区床面	縦線に 磨打痕
10	磨石	閃石 安山岩	13.5	5.8	3.8	400	Ⅱ区床面	縦線に 磨打痕



第139図 H36号住居址カマド実測図 (1:30)



写真129 H36号住居址カマド

カマド

カマドは北壁中央部に位置する。

煙道部は、舟先状に緩やかな傾斜で掘り込まれ、灰白色粘土が貼られていた。

袖部の構築は、白色粘土を構材とするもので、両袖部の一部が残存していた。右袖部では軽石が組み込まれており、カマドの構築に関連すると思われる軽石の分布が、カマド前方の2層中から住居中央の床面にみられた。

火床部は三角形の掘り込みの後に、炭化物片を含む褐色粘質土(①層)とロームブロックを含

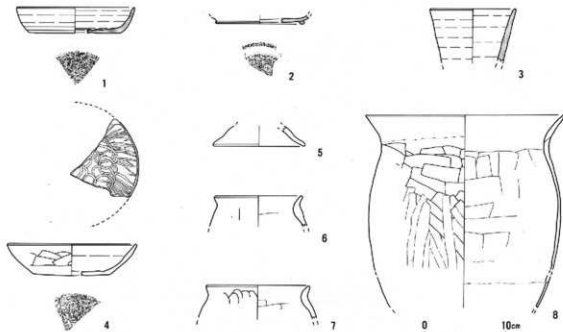
む暗褐色土(②層)で埋め戻されていた。

遺物

検出された主要遺物は、須恵器環・長頸壺、土師器環・台付甕・甕、蔽石である。

1は、盤状を呈し、底部に回転ヘラケズリのみられる須恵器環である。N区の2層下部で出土している。2は、底部に回転ヘラケズリのみられる須恵器高台付環の底部破片で、1区2層の出土である。3は、須恵器長頸壺頸部破片で、1区2層から出土している。

4は、畿内系暗文を有する土師器環で、1区1



第140図 H36号住居址出土土器 (1:4)

表54 H36号住居址出土土器観察表

図号	種別	器形	度量	残存	成形	器	色調	出土位置	備考
1	須恵器	杯	(14.4) (11.1) 3.2	口縁1/10 底面1/5	ロタコ	→底面切り離し(切り離し方不明) 外面: 底面回転ヘラケズリ	内面: 2.50 Y6/1 外面: 2.50 Y6/1 断面: 2.50 Y6/1	Ⅱ区2層	
2	須恵器	杯	(10.0) (< 1.1)	底面1/8	ロタコ	→底面切り離し(切り離し方不明) → 底台貼付 外面: 底面回転ヘラケズリ	内面: 2.50 Y6/1 外面: 2.50 Y6/1 断面: 10 Y R5/4	Ⅰ区2層	
3	須恵器	長胴壺	(10.5) (< 8.7)	口縁1/4	ロタコ		内面: 7.5 Y6/1 外面: 5 Y6/1 断面: 5 Y7/3	Ⅰ区2層	
4	土師器	杯	(15.8) (9.4) 3.9	口縁1/5 底面1/4	ロタコ	内面: みこみ形ナゲ→口縁コナゲ→筋文(口縁部に放射状筋文・みこみ形四重のらせん状筋文) 外面: 口縁コナゲ・底部・底面手持ちヘラケズリ	内面: 7.5 Y R6/6 外面: 7.5 Y R6/6 断面: 7.5 Y R6/6	Ⅰ区1層	横内系 筋文
5	土師器	台付壺	(11.2) (< 2.5)	胴部1/4	非ロタコ	内面: ナゲ(刷毛状工具) 外面: ナゲ(刷毛状工具)	内面: 7.5 Y6/1 外面: 7.5 Y6/1 断面: 7.5 Y R4/6	Ⅱ区1層 Ⅲ区2層	
6	土師器	壺	(10.7) (< 3.8)	口縁1/8	非ロタコ	内面: 口縁コナゲ→胴部ヘラケズリ 外面: 口縁コナゲ→胴部ヘラケズリ	内面: 5 Y R6/4 外面: 5 Y R5/6 断面: 5 Y R6/6	Ⅱ区2層	
7	土師器	壺	(12.0) (< 4.2)	口縁1/5	非ロタコ	内面: 口縁コナゲ→胴部ヘラケズリ 外面: 口縁コナゲ→胴部ヘラケズリ	内面: 10 Y R3/4 外面: 7.5 Y R5/4 断面: 7.5 Y R5/3	カマド	
8	土師器	壺	(24.2) (25.7)	口縁1/2	非ロタコ	内面: 口縁コナゲ→胴部ヘラケズリ 外面: 口縁コナゲ→胴部ヘラケズリ	内面: 7.5 Y R6/4 外面: 2.5 Y R6/6 断面: 5 Y R7/4	Ⅰ区2層 カマド	

層の出土である。5は、土師器台付壺の脚部で、Ⅱ区2層とⅢ区1層に破片が分布していたものである。6・7は、口縁が短く外反する土師器小形壺の破片で、6はⅢ区2層、7はカマド内2層から出土している。8は、「く」の字状口縁を呈する土師器長胴壺で、カマド内とカマド手前の2層中に破片が分布していたものである。

9・10は葎石と考えられ、9は右側縁、10は両端に破打痕が観察される。9は南壁際の床面、10は南壁周溝から検出されている。

本住居址から検出された土器群は、須恵器杯・土師器杯・土師器長胴壺の特徴と組成を基準にすれば、奈良時代後半・八世紀第Ⅲ四半期の土器様相を示すと考えられようか。

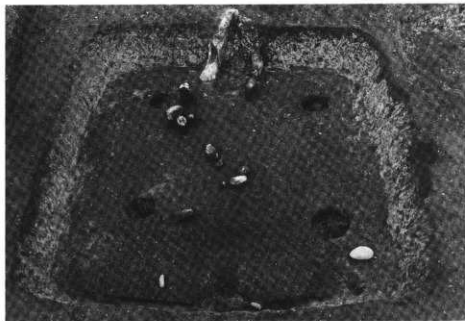


写真130 H36号住居址

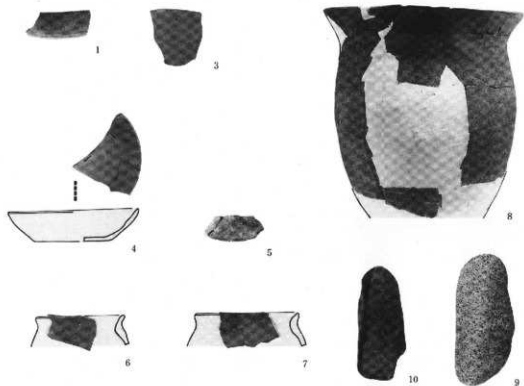


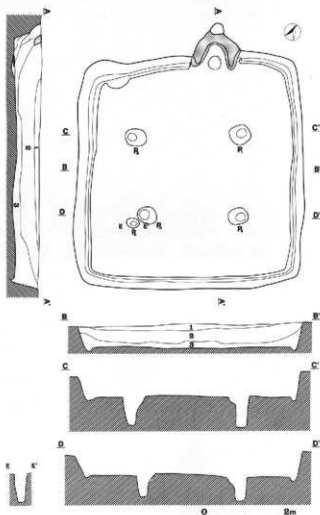
写真131 H36号住居址出土遺物

H37号住居址は、第1区Hき・く3・4グリッドより検出された。

平面形態は、南北5.7m、東西5.5mの南北に長い隅丸方形を呈する。床面積は25.8㎡を測る。主軸方向はN-25°-Wを指す。壁は西壁が120度程の緩傾斜で、他は100度程の急傾斜で立ち上がる。確認面からの壁高は52～61cmを測る。壁直下に幅8～24cm、深さ6～12cmの周溝が全周する。

主柱穴は、住居中央よりに規則的に配置された4個（P1～P4）である。また、P4西脇に小ピット（P5）が検出されている。P1は48×50cm、深さ70cm、P2は42×53cm、深さ68cm、P3は41×50cm、深さ59cm、P4は40×50cm、深さ58cm、P5は24×31cm、深さ70cmを測る。

住居覆土は3層に分層された。1層は、パミス・ローム粒子を多く含む黒褐色土、2層はパミス・ロームブロックを多量に含む暗褐色土、3層はパミス・ロームブロックを多量に含む黒褐色土であった。



第141図
H37号住居址実
測図（1：80）

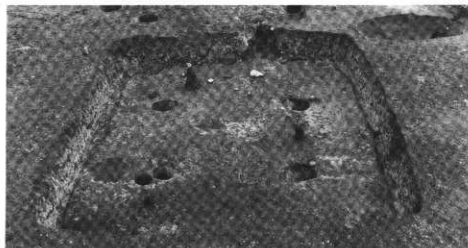


写真132
H37号住居址

カマド カマドは北壁中央部よりやや東側に構築されていた。

燃焼部は、壁外に設けられており、40×80cm程度の長方形を呈する。煙道部は、その奥壁中央部を20×30cm程度に角柱状に掘り込み、上部は半円形状の掘り込みからなっていた。その半円形状の掘り込み部分に、土師器長胴甕1個が据えられていた。

構築材は、橙色粘土を主体としたものと考えられ、煙道部の甕を固定した部分と両袖部の一部に残存していた。また、カマド手前の床面に面取りされた軽石の分布がみられた。

火床部は、焚口部を中心に円形に掘り窪められ、暗褐色土(⑤層)の充填と焼土がみられた。

覆土は、煙道部・奥壁部を埋める堆積として、暗褐色土(①層)、橙色粘土ブロックを含む黄褐色土(②層)、炭化物を多く含む暗褐色土(③層)、灰褐色土(④層)がみられた。

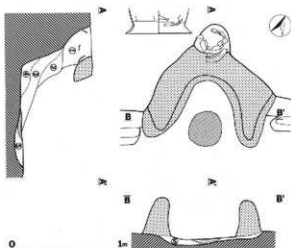
遺物 検出された主要遺物は、須恵器蓋・坏、土師器甕、鉄鏝である。

1は、須恵器蓋で皿状のつまみ部、かえりを有するものである。Ⅱ区2層とⅢ区3層に破片が分布していた。2～5は、須恵器坏である。2～4の底部は、回転ヘラ切りで切り離され、2・3は回転ヘラケズリ、5は手持ちヘラケズリで調整されている。4はP4脇の床面、2はカマド左手前の床面近くの3層、3はカマド右袖、5は1層から検出された。6は、盤状を呈する須恵器高台付坏で、Ⅲ区3層の出土。

7は、土師器小形球胴甕でP1脇床面の出土。8は、カマド煙道部に使用されていた「く」の字状口縁を呈する土師器長胴甕である。

9は鉄鏝の基部と考えられるもので、Ⅱ区1層中の出土である。

本住居址から検出された土器群は、須恵器蓋、須恵器坏、土師器長胴甕の特徴と組成から、奈良時代前半・八世紀第1四半期の土器様相を示すものと考えられる。



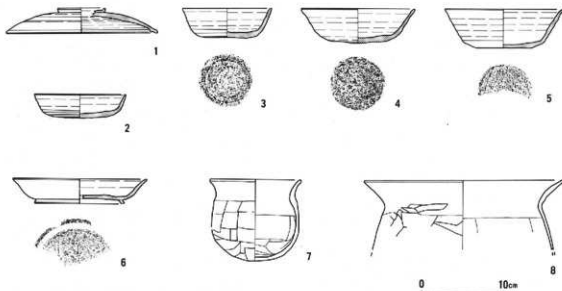
第142図 H37号住居址カマド実測図(1:30)



写真133 カマド煙道の土器



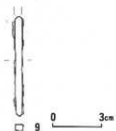
写真134 H37号住居址カマド



第143図 H37号住居址出土土器(1:4)

表55 H37号住居址出土土器観察表

検出番号	種別	器形	数量	残存	成形	調査	色票	出土位置	備考
1	浅形鉢	蓋	(18.4) (5.8) 3.1	つぎみへ 口縁1/4	コタテ	→つぎみ貼付 外面: 天井部回転ヘラケズリ	内面: N7/0 外面: N7/0 断面: 10Y R6/2	I区2層 II区3層	
2	浅形鉢	杯	11.2 7.5 3.0	完形	コタテ	→底面回転ヘラケリ 外面: 底面回転ヘラケズリ	内面: 5 Y 6/1 外面: N7/0 断面: 5 Y 6/1	I区3層	
3	浅形鉢	杯	10.9 7.0 3.8	完形	コタテ	→底面回転ヘラケリ 外面: 底面回転ヘラケズリ	内面: 10 Y 7/1 外面: 10 Y 7/1 断面: 10 Y 7/1	カマド跡	
4	浅形鉢	杯	(14.0) (7.0) 4.2	口縁1/2 底面完形	コタテ	→底面回転ヘラケリ 外面: 底面ナデ	内面: 10 Y 7/1 外面: 10 Y 7/1 断面: 10 Y 7/1	II区床面	
5	浅形鉢	杯	(14.0) (6.8) 4.7	口縁1/4 底面1/2	コタテ	→底面切り離し(切り離し方不明) 外面: 底面手持ちヘラケズリ?	内面: 10 G 5/1 外面: 10 G 5/1 断面: 10 G 5/1	I区1層	
6	浅形鉢	杯	(18.4) (11.0) 3.0	口縁1/10 底面1/4	コタテ	→底面切り離し(切り離し方不明) →高台貼付 外面: 底面回転ヘラケズリ	内面: 5 Y 5/1 外面: 5 Y 5/1 断面: 5 Y 5/1	II区3層	
7	土師器	壺	(11.2) — 9.9	口縁1/4	非コタテ	内面: 胴部ヘラケダテ → 口縁ヨコナデ 外面: 胴部ヘラケズリ → 口縁ヨコナデ	内面: 7.5 Y R6/4 外面: 7.5 Y R4/1 断面: 7.5 Y R6/4	I区床面	
8	土師器	甕	24.0 — (8.5)	口縁1/4	非コタテ	内面: 胴部ヘラケダテ → 口縁ヨコナデ 外面: 胴部ヘラケズリ → 口縁ヨコナデ	内面: 2.5 Y R4/4 外面: 5 Y B5/4 断面: 2.5 Y R4/4	カマド附近	



第144図 H37号住居址出土鉄器(1:2)

表56 H37号住居址出土鉄器観察表

検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
9	鉄器	鉄	(8.1)	0.5	0.4	(4.5)	II区1層	

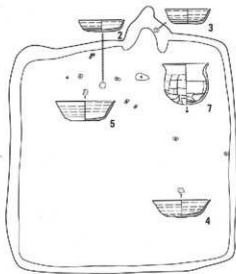


写真135 土器3 出土状態



第145図 H37号住居址遺物分布図



写真136 土器4 出土状態

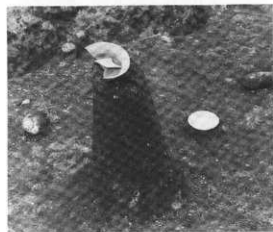


写真137 土器2・5 出土状態

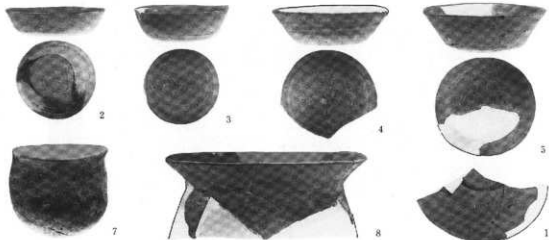


写真138 H37号住居址出土遺物

H38号住居址は、第1区Ⅱこ5グリッドより検出され、砂礫層を主体とする自然流路（M10号溝状遺構）に掘り込まれている。なお、中央から南側は、H39号住居址によって破壊されている。

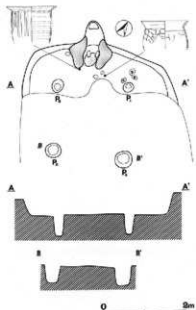
平面形態は、隅丸方形を呈したと考えられ、残存部では東西3.7mを測る。主軸方向は $N-30^{\circ}-W$ 程度と推定される。

壁は、東壁が 105 度程の急傾斜な立ち上がりである。確認面からの壁高は $40\sim 54$ cmを測る。周溝は検出範囲では存在しない。

主柱穴は、H39号住居址の床面下で検出されたP3とP4が本住居址に伴うものと判断できることから、規則的に配置されたP1～P4の4個で構成されていたと考えられる。P1は 24×26 cm、深さ 51 cm、P2は 34×28 cm、深さ 52 cm、P3は 35×38 cm、深さ 43 cm、P4は 42×42 cm、深さ 48 cmを測る。

住居覆土は、2層の堆積が認められた。

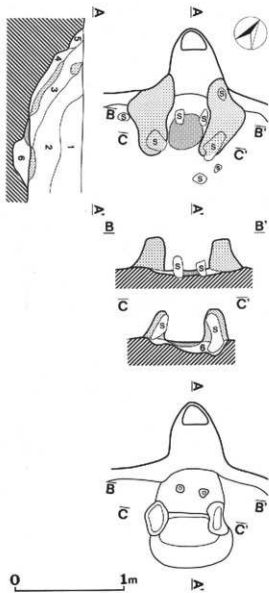
1層は、砂礫を多量に含み、パミス・ロームブロックを多く含む黒褐色土であり、2層は、砂礫を多量に含み、パミス・ロームブロックを多く含む黒色土である。



第146図 H38号住居址実測図（1：80）



写真139 H38号住居址



第147図 H38号住居址カマド実測図(1:30)

カマド

カマドは北壁中央部に構築されていた。
煙道部は、舟先状を呈する緩傾斜の掘り込みで、50cm程壁外に突出している。

袖部は、橙色粘土を主体に構築され、両袖部の一部が残存していた。また、扁平な軽石が、両袖部の先端に1個単位で埋め込まれていた。

火床部は、奥壁側が方形に、焚口部が楕円形に掘り込まれ、焚口部の掘り込みはローム・砂・黒



写真140 H38号住居址カマド

褐色土（6層）で埋め戻されていた。また、軽石を円柱状に加工した支脚石2個が並べて据えられていた。

カマド覆土は、橙色・黄橙色粘土ブロック・炭化物片を多く含む黒褐色土（3層）、崩落した構築材の橙色粘土層、煙道部にみられた暗褐色土（4層）と褐色土（5層）の堆積である。

遺物

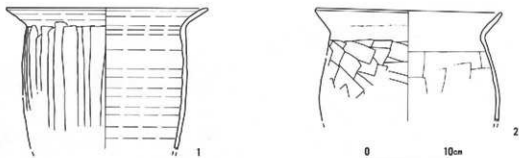
検出された主要遺物は、土師器甕のみであった。

1は、ロクロ整形による土師器長胴甕で、口縁

部に最大径を有し、胴部に縦方向のヘラケズリが施されている。カマド内に破片が集中していたものである。

2は、「く」字状の口縁を呈する土師器長胴甕で、カマド内とカマド手前の2層中に破片が分布していたものである。

以上の土師器長胴甕は、一応、奈良時代後半、さらには八世紀第Ⅲ四半期の土器と考えられようか。



第148図 H38号住居址出土土器（1：4）

表57 H38号住居址出土土器観察表

調査番号	種別	器形	数量	残存	形状	陶	色	出土位置	備考
1	土師器	甕	24.8 — (17.5)	口縁4/5	ロクロ	外面：割部ヘラケズリ	内面：7.5Y R7/6 外面：7.5Y R4/2 断面：7.5Y R4/1	カマド	
2	土師器	甕	22.8 — (13.8)	口縁完形	非ロクロ	内面：割部ヘラケズリ→口縁コナダ 外面：口縁コナダ→割部ヘラケズリ	内面：2.5Y R4/4 外面：2.5Y R4/4 断面：2.5Y R4/4	カマド3層 1区2層	

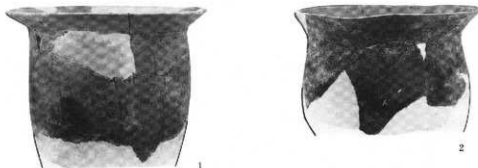


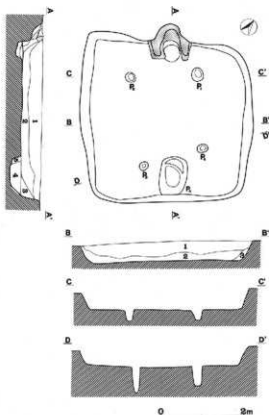
写真141 H38号住居址出土遺物

H39号住居址は、第1区Hこ5・6グリッドより検出された。

平面形態は、南北4.0m、東西4.2mの隅丸方形を呈する。床面積は13.1㎡を測る。主軸方向はN-39°-Wを指す。壁は110程度の急傾斜で立ち上がり、確認面からの壁高は33~48cmを測る。周溝は存在しない。

主柱穴は、P1~P4の4個が確認された。P3は南側に外れていが、他のピットは規則的に配置されていた。掘り方は円形を呈するが、P1・P2が浅く、P3・P4が深いという差がみられた。P1は33×30cm、深さ25cm、P2は25×26cm、深さ28cm、P3は22×19cm、深さ65cm、P4は20×26cm、深さ48cmを測る。また、南壁中央に接してP5が検出されている。P5は94×66cm、深さ30cmの大形楕円形の掘り方である。

住居覆土は、1層が、バミス・ロームブロック・砂礫を多量に含む暗褐色土、2層がバミス・ロームブロック・砂礫を含む暗褐色土、3層が黒褐色土であった。



第149図 H39号住居址実測図(1:80)

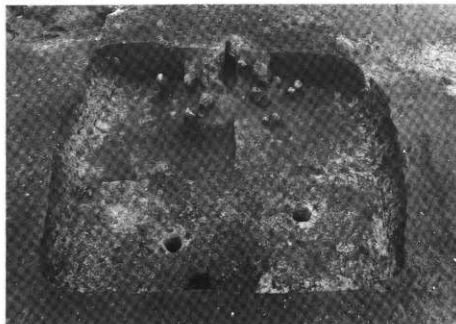
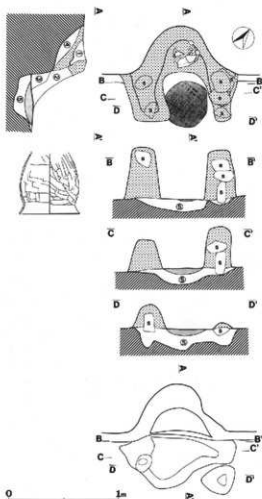


写真142

H39号住居址



第150図 H39号住居址カマド実測図(1:30)

カマド

カマドは北壁中央部に構築されていた。

煙道部の構築方法は、①半円形状の掘り込みを壁外に設ける。②黒褐色土(④層)と橙色粘土を貼る。③底部を抜いた土師器長胴甕を据え、橙色粘土を貼って固定する(ただし、長胴甕を覆う粘土は崩落しており、構築時の状態ではなかった)。という過程を有していた。

袖部の構築は、面取りした軽石を組み上げ、橙色粘土を主な構材として、覆い固めるという方法が用いられていた。特に、右袖部では構築時の石組が良好に遺存していた。

火床部は、楕円形に15cm程掘り込まれ、褐色土(⑤層)を充填して形成されていた。



写真143 カマド煙道の土器



写真144 H39号住居址カマド

カマド覆土は、橙色粘土ブロックを含む黒褐色土(②層)、煙道部に暗褐色土(①層)、奥壁部に褐色粘質土(③層)の堆積がみられた。

遺物

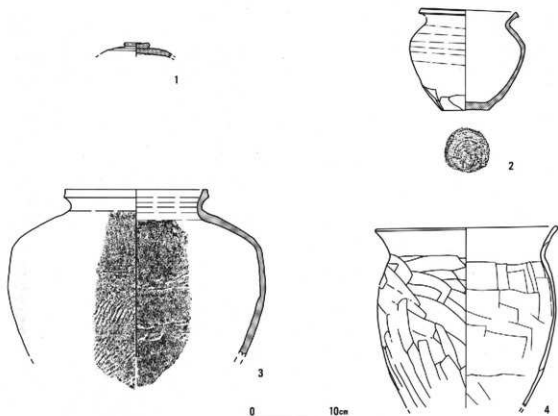
検出された主要遺物は、須恵器蓋・短頸甕・甕、土師器甕、編物石21個である。

1は、ボタン状のつまみ部を有する須恵器蓋で、1層中の遺物である。

2は、須恵器短頸甕である。口縁部を僅かに欠くが、伏せられた状態でP1南脇の床面近くから検出されている。

3は、頸部のしまる須恵器甕で、Ⅱ区とⅢ区の2層中に破片が分布していたものである。

4の土師器長胴甕は、カマド煙道部に用いられ



第151図 H39号住居址出土土器（1：4）

表58 H39号住居址出土土器観察表

種別 番号	器名	器形	法量	残存	成形	裏	表	色調	出土位置	備考
1	灰土器	蓋	— 3.9 (1.7)	つまみ 完形	ロテコ	→つまみ取付 外面：天井部印転ヘラケズリ		内面：10G4/1 外面：10G4/1 断面：10G5/1	Ⅱ区1層	
2	灰土器	短頸壺	(12.1) 5.5 12.3	口縁1/5 底形完形	ロテコ	→底面印転み切り 外面：底面外用手持ちヘラケズリ		内面：N3/0 外面：N3/0 断面：N3/0	Ⅰ区2層	
3	灰土器	壺	(17.5) — (20.4)	口縁1/5	ロテコ	内面：口縁コナダ・胴部当て高底横ナダ 外面：口縁コナダ・胴部写き目		内面：7.5Y4/1 外面：7.5Y3/3 断面：7.5Y4/1	Ⅱ・Ⅲ区2層	
4	土器	壺	22.9 — (22.3)	口縁完形	赤ロテコ	内面：口縁コナダ・胴部ヘラケズリ 外面：口縁コナダ・胴部ヘラケズリ		内面：5YR4/4 外面：5YR3/0 断面：5YR6/5	カマド縁道	

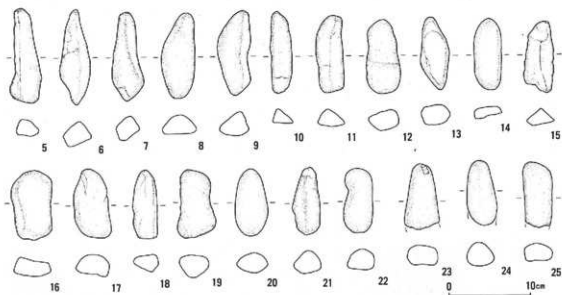
ていたものである。

5～25の河原石は、西壁直下の床面において、径25cm程の範囲に積み上げられた状態で遺存していた一群で、編物石と考えられるものである。

完形礫ではない23～25の3点を除くと、長さは7.8～11.6cmの範囲にあり、平均は9.3cm、幅は2.7～5.0cmの範囲にあり、平均は3.9cm、厚さは2.5～4.6cmの範囲にあり、平均3.5cm、重量は60～

150gの範囲にあり、平均103gのサイズを有する。形状は棒状礫が主体を占め、古墳時代後期のものと比較すると、本住居址の方が小形礫を主体に利用されていた。

検出された遺物は少なく、特徴的な土器も少ないが、須恵器短頸壺・土師器長胴壺を、奈良時代後半さらには八世紀第Ⅲ四半期ごろの土器と考え、本住居址の時期推定としたい。



第152图 H39号住居址出土石器(1:4)

表59 H39号住居址出土石器观察表

序号	器名	材质	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	層	号	群	器名	材质	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	層	号
5	礮物石	礮石 安山岩	11.6	4.0	2.8	100	Ⅱ区床面		16		礮物石	礮石 安山岩	8.6	5.0	4.8	120	Ⅱ区床面		
6	礮物石	礮石 安山岩	11.0	3.8	3.5	110	Ⅱ区床面		17		礮物石	礮石 安山岩	8.5	4.6	4.2	120	Ⅱ区床面		
7	礮物石	礮石 英安山岩	10.9	3.9	2.9	125	Ⅱ区床面		18		礮物石	礮石 安山岩	8.4	3.1	3.1	80	Ⅱ区床面		
8	礮物石	礮石 角閃石 安山岩	10.5	4.2	4.1	130	Ⅱ区床面		19		礮物石	安山岩	8.4	4.6	3.8	135	Ⅱ区床面		
9	礮物石	安山岩	10.3	4.2	3.6	150	Ⅱ区床面		20		礮物石	角閃石 安山岩	8.3	4.0	3.8	100	Ⅱ区床面		
10	礮物石	礮石 安山岩	10.0	2.7	2.5	90	Ⅱ区床面		21		礮物石	礮石 安山岩	8.2	3.5	3.4	85	Ⅱ区床面		
11	礮物石	礮石 安山岩	9.3	3.5	3.4	90	Ⅱ区床面		22		礮物石	安山岩	7.8	3.7	3.3	100	Ⅱ区床面		
12	礮物石	礮石 安山岩	9.0	4.2	3.2	125	Ⅱ区床面		23		礮物石	砂 礮物石	(8.1)	4.3	3.7	(95)	Ⅱ区床面		
13	礮物石	安山岩	8.9	3.6	3.6	95	Ⅱ区床面		24		礮物石	角閃石 安山岩	(8.0)	3.7	3.3	(90)	Ⅱ区床面		
14	礮物石	礮石 安山岩	8.8	3.5	3.4	70	Ⅱ区床面		25		礮物石	礮物石	(8.0)	3.5	3.4	(95)	Ⅱ区床面		
15	礮物石	礮石 安山岩	8.7	3.6	3.3	85	Ⅱ区床面												

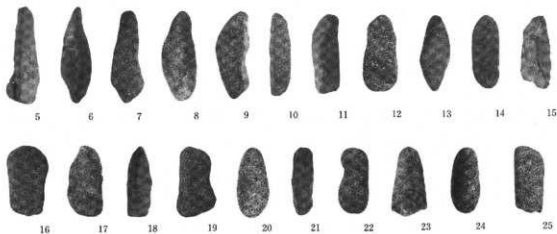
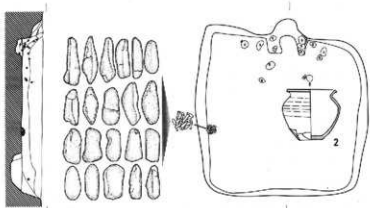


写真145 H39号住居址出土石器



第153图 H39号住居址遗物分布图



写真146 編物石出土状態



写真147 土器2出土状態

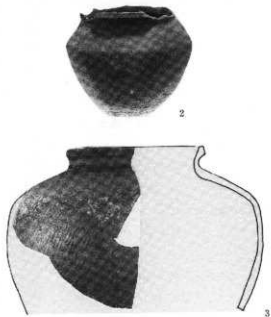


写真148 H39号住居出土土器

H40号住居址は、第1区Mあ6・7グリッドより検出された。西壁側は調査区域外であるため調査は行われていない。

調査時点の所見では、カマド先端と北壁上部が砂礫から構成されていたため、自然流路（M10号溝状遺構）の堆積と把握し、カマド先端と北壁上部はM10号溝状遺構によって破壊されていたと判断したが、検出された遺物が、M10号溝状遺構を切るH38住居址・H39号住居址より新しい遺物と考えられるため、本住居址がM10号溝状遺構を切っていたと考えるに至った。

平面形態は、隅丸方形を呈していたと考えられる。南北長は5.7mを測る。

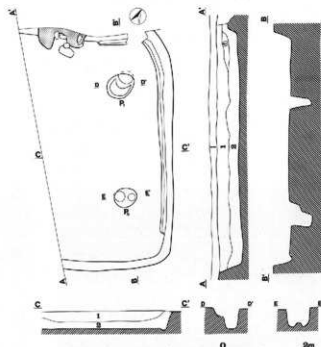
東南壁は、110度程の急傾斜で立ち上がり、確認面からの壁高は40cm程度を測る。北壁東側から東壁の壁直下で、幅9～18cm、深さ2～6cmの断面U字形を呈する周溝が確認されている。

ピットは、2個（P1・P2）検出されている。P1・P2は南北に規則的に配置されており、支柱穴と考えられる。掘り方は楕円形を呈し、2段の掘り込みである。P1は73×55cm、深さ56cm、P2は46×55cm、深さ52cmを測る。

住居覆土は2層の堆積からなっていた。

1層は、バミス・ロームブロック・砂礫を含む暗褐色土であり、2層はバミス・ロームブロック・砂礫を含む黒褐色土であった。

なお、本住居址の検出面は、第V層であり、第V層まで耕作が及んでいたことから、壁上部が削平されていたことは明らかである。



第154図 H40号住居址実測図（1：80）



写真149 H40号住居址

カマド

カマドは北壁中央部に構築されていたものと思われる。前記の理由で煙道部の構造は把握できなかった。

カマド周辺に面取りした軽石が散在しており、破壊された状態を示していたが、軽石を組み上げて、黒褐色土と橙色粘土で覆い固めた袖部の一部が残存していた。

火床面では、袖石が埋め込まれていたピットと楕円形の掘り込みがみられ、埋土には、ロームと黒褐色土が用いられていた。

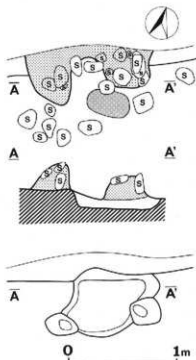
遺物

検出された主要遺物は、須恵器蓋・杯、土師器杯・甕である。

1はつまみ部が宝珠形を呈する須恵器蓋で、1層から検出された遺物である。2の須恵器蓋は、Ⅱ区の2層から出土したものである。

3～5は須恵器杯で、3・4が回転糸切り未調整の底部をなし、5は手持ちヘラケズリが施された底部をなす。3はカマド右脇の床面、4はP2西脇の床面近くの2層から検出されている。5は1層中の遺物である。

6は内面に黒色処理が施された土師器杯で、底部は回転糸切りの後に、外周まで回転ヘラケズリが施されている。カマド右脇の2層から出土している。



第155図 H40号住居址カマド実測図(1:30)

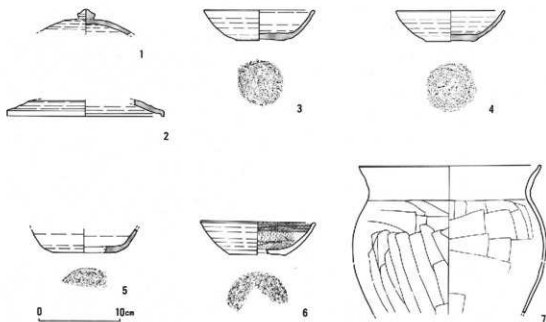
7は胴上部が変る土師器長胴甕で、カマド右袖部上面から出土している。

8は軽石を用いたもので、砥石状をなすものである。2層から検出されている。

本住居址から検出された土器群は、須恵器杯、土師器杯、土師器長胴甕の特徴と組成から、平安時代前半、九世紀前半の土器様相を示すものと考えられようか。



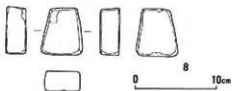
写真150 H40号住居址カマド



第156図 H40号住居址出土土器(1:4)

表60 H40号住居址出土土器観察表

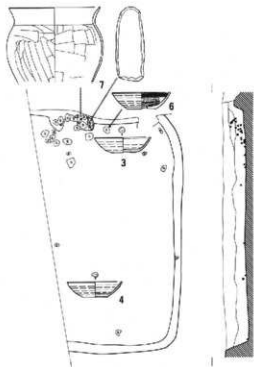
図号 番号	種別	器形	数量	残存 状況	成形	質	量	色調	出土位置	備考
1	須恵器	蓋	— 2.1 (3.1)	つまみ 完整	コタコ	つまみ縁付		内面: 10Y7/1 外面: 10Y7/1 断面: 10Y7/1	I区1層	
2	須恵器	蓋	(19.2) — (2.6)	口縁1/6	コタコ	外面: 天井部回転ヘラケズリ		内面: N4/0 外面: 7.5Y5/1 断面: 7.5Y5/1	II区2層	
3	須恵器	杯	13.5 5.9 3.7	完整	コタコ	一底部回転糸切り		内面: 2.5Y6/2 外面: 2.5Y6/2 断面: 2.5Y6/1	I区表面	火焼あり
4	須恵器	杯	13.3 6.2 3.7	口縁2/3 底面完整	コタコ	一底部回転糸切り		内面: N5/0 外面: N5/0 断面: N5/0	II区2層	
5	須恵器	杯	— (8.0) (2.9)	底面1/4	コタコ	一底面切り磨し(切り磨し力不明) 外面: 底面手押しヘラケズリ		内面: 5Y6/1 外面: 5Y6/1 断面: 5Y6/1	I区1層	火焼あり
6	土器	杯	(14.0) (6.9) 4.0	口縁~ 底面1/2	コタコ	一底面回転糸切り 内面: ヘラリガキ→黒色処理 外面: 底面および外周回転ヘラケズリ		内面: 7.5YR6/4 外面: 7.5YR6/4 断面: 7.5YR6/4	I区2層	
7	土器	壺	(22.0) — (18.4)	口縁1/2	赤コタコ	内面: 刷毛ヘラケズリ→口縁コナデ 外面: 刷毛ヘラケズリ→口縁コナデ		内面: 2.5YR5/6 外面: 2.5YR5/6 断面: 2.5YR5/6	カマド①層 I区1層	



第157図 H40号住居址出土土器(1:4)

表61 H40号住居址出土石器観察表

図号番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
8	砥石	礫石	5.8	5.1	2.5	48	II区2層	



第158圖 H40号住居址遺物分布圖

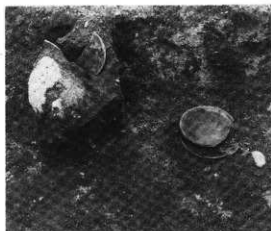


写真151 土器3・6出土狀態



写真152 土器4出土狀態

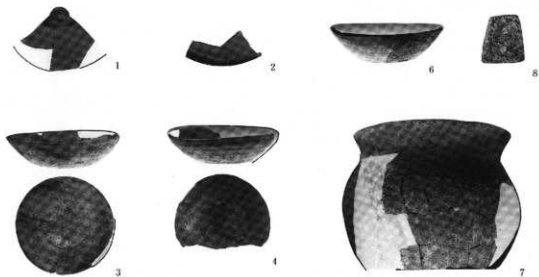


写真153 H40号住居址出土遺物

H41号住居址は、第1区Hく・け8グリッドより検出された。西壁上部をH43号住居址、中央から南側をH42号住居址、カマドの一部を攪乱によって破壊されている。

平面形態は、東西で3.5mを測り、隅丸方形を呈していたと考えられる。確認面からの壁高は、40cm程度を測る。周溝は存在しない。

ピットは、支柱穴2個(P1・P2)が検出されている。また、H42号住居址の床面で検出された2個(P3・P4)も、本住居址の支柱穴と考えられる。P1は44×52cm、深さ67cm、P2は26×44cm、深さ80cm、P3は43×76cm、深さ60cm、P4は43×69cm、深さ48cmを測る。P3とP4の掘り方は2段の掘り込みである。

住居覆土は、バミス・ローム粒子を多く含む暗褐色土(1層)とバミス・ローム粒子を含む黒褐色土(2層)の堆積が確認された。

カマド

北壁中央部に位置していたが、攪乱を受けかつ半壊状態にあった。袖部は、左袖部を構築していたと考えられる灰白色粘土が一部残存し、右袖部に相当する箇所では深さ20cm程度のピット状の掘り方が存在していた。また、左袖脇には深さ15cm程度の小ピットが検出された。火床面は楕円形状に10cm程度掘り込まれており、埋土は橙色粘質土(5層)と褐色粘質土(6層)であった。

カマド覆土は、灰白色粘土ブロックを多く含む黒褐色土(3層)、灰白色粘土ブロックを多量に含む橙色粘質土(4層)である。

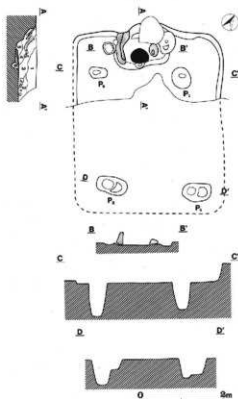
遺物

須恵器甕、土師器羽釜・甕が検出されている。

1はロクロ成形による土師器羽釜で、カマド手前の3層から出土している。

2は土師器長胴甕で、1層中の遺物である。

3は広口の須恵器甕で、東壁脇の床面から検出



第159図 H41号住居址実測図(1:80)

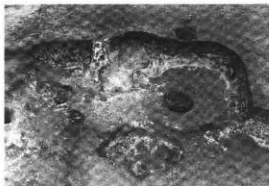
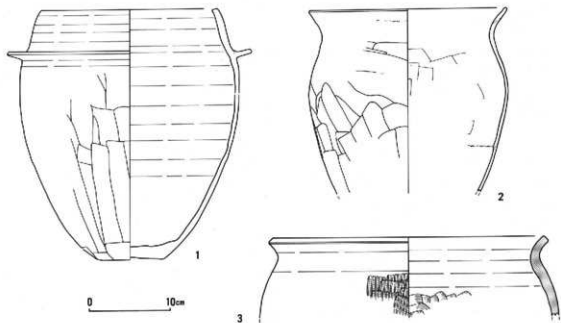


写真154 H41号住居址

されている。

土師器羽釜と土師器甕の特徴が本住居址の時期を決めるものであるが、H42号住居址との切り合い関係を考慮し、平安時代前半の住居址と考えておきたい。



第160図 H41号住居址出土土器 (1:4)

表62 H41号住居址出土土器観察表

器図 番号	器 名	器形	口 径	残 存	成 形	装 飾	色 調	出土位置	備 考
1	土製器	羽釜	(21.5) 8.5 30.9	口縁1/5 底面完全	コナロ	一帯帯貼付 内面：胴部下帯→流部ナデ 外面：胴部ヘラケズリ・流部ナデ	内面：7.5Y R5/3 外面：7.5Y R6/8 断面：10Y R7/4	1・3区3層	
2	土製器	甕	(24.0) — (22.7)	口縁1/5	赤ナロ	内面：口縁コナデ・胴部ヘラナデ 外面：口縁コナデ・胴部ヘラケズリ	内面：5Y R1.7/4 外面：5Y R4/8 断面：2.5Y R6/6	1・3区1層	
3	灰褐色	甕	— (9.8)	口縁1/5	コナロ	内面：胴部当て具痕 外面：胴部印き目	内面：10Y5/1 外面：2.5GY5/1 断面：7.5Y5/1	1区灰室	

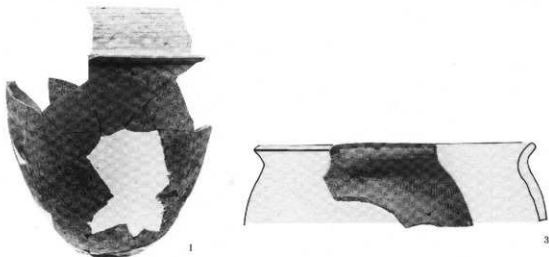


写真155 H41号住居址出土遺物

(39) H42号住居址

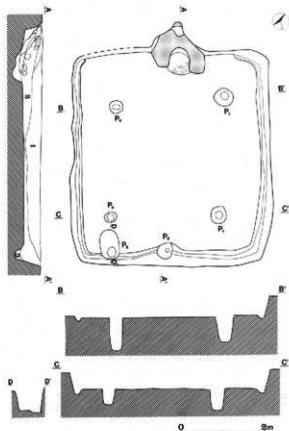
平安時代

H42号住居址は、第1区H \times 8・9グリッドより検出された。北西隅をH43号住居址によって破壊されている。

平面形態は、南北5.3m、東西4.8mの南北に長い隅丸方形を呈する。床面積は22.1m²を測る。主軸方向はN $-$ 30 $^{\circ}$ -Wを指す。壁は100度程の急傾斜で立ち上がる。確認面からの壁高は150cm程度を測る。北壁を除いて、壁直下に幅6 \sim 23cm、深さ2 \sim 13cmの周溝が巡っている。

主柱穴は、規則的に配置された4個(P1 \sim P4)が確認されている。P1は45 \times 45cm、深さ63cm、P2は30 \times 33cm、深さ78cm、P3は25 \times 30cm、深さ38cm、P4は41 \times 46cm、深さ52cmを測る。また、南壁中央の周溝内に位置する円形の小ピット(P6)、P3の南側に位置し南壁に接す楕円形のピット(P5)が検出されている。P6は39 \times 38cm、深さ23cm、P5は172 \times 46cm、深さ53cmを測る。

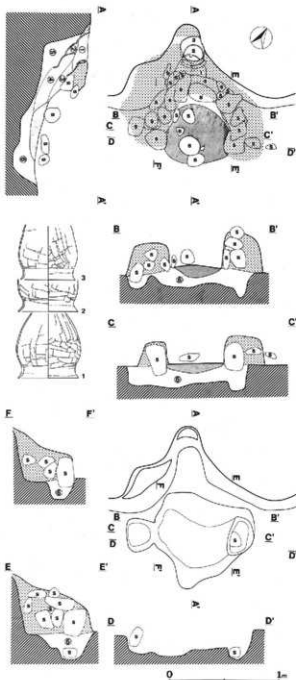
住居覆土は、1層がバミス・ローム粒子を多く含む黒褐色土、2層がバミス・ロームブロックを多量に含む黒色土、3層が周溝に堆積した暗褐色土である。



第161図 H42号住居址実測図(1:80)



写真156 H42号住居址カマド



第162図 H42号住居址カマド実測図(1:30)



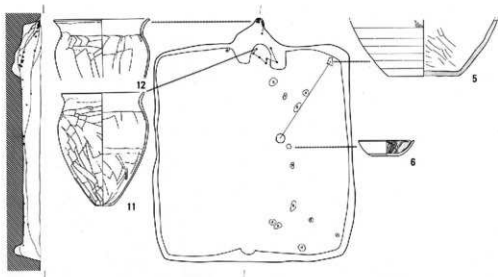
写真157 カマド煙道の土器



写真158 カマド左袖の石組



写真159 カマド右袖の石組



第163図 H42号住居址遺物分布図

カマド

カマドは北壁中央部に構築され、良好な状態で遺在していた。

煙道部の構築は、①舟先状に突出させた急傾斜の掘り込みを壁外に設ける。②黒褐色土（⑤層）を充填して、緩傾斜の立上がりを形成する。③底部を抜いた土師器長胴甕3個を連結して設置する。④両袖部基部に据えられた袖石に高架した石組で連結した長胴甕の下半部を支える。⑤袖部の構築に連動して全体を橙色粘土で覆い固めて整形し完成させる。という方法を用いていた。

袖部の構築方法は、面取りした軽石を2段ないし3段に整然と積み上げて、強固な石組を形成し、それを橙色粘土で覆い固めたものである。

石組の方法は、平坦に加工した面を組み合わせ、隙間に小形のを詰め込むといった在り方がみられた。また、加工された平坦面を燃焼部側に設置しており、配列は燃焼部に張りをもたせるために内湾する配置をなしていた。なお、火床面にある軽石は左袖部の石組上部が崩落したものと思われる。

掘り方には、袖石を埋め込んだピットと火床面に深さ20cm程の不整形の掘り込みがあった。その

掘り方は、ロームブロックを含む黒褐色土（⑥層）で埋められ、火床面が形成されていた。また、焼土が厚く堆積していた。

覆土は、煙道部の堆積に暗褐色土（①層）、褐色土（②層）、黒褐色土（③層）、明褐色土（④層）がみられた。

遺物

検出された主要遺物は、須恵器環・壺・甕、土師器環・甕、砥石である。

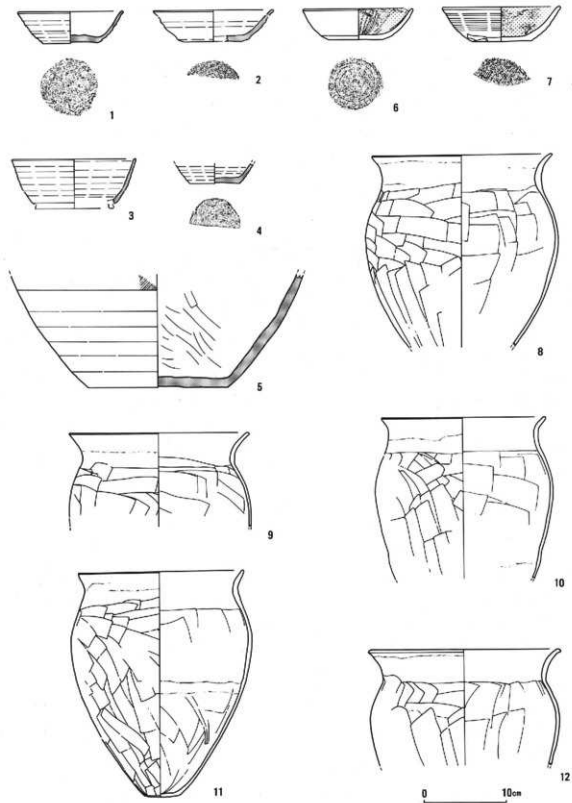
1・2は、底部切り離し手法が回転系切りによるもので、底部に調整が施されていない須恵器環である。共にⅢ区の1層から出土している。

3は、器高が高く、口径の大きい須恵器高台付環で、カマド手前の2層から検出されている。

4は、須恵器壺底部で、回転系切りをみせる。Ⅳ区の1層から出土している。

5は、平底の須恵器大甕で、胴部に回転ヘラケズリが施されている。北東隅と住居中央付近の床面に破片が分布していたものである。

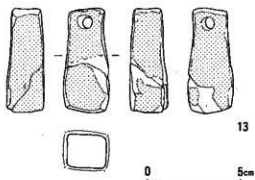
6・7は、内面が黒色処理されたロクロ成形の土師器環である。6は回転系切りの後に、底部および外周に回転ヘラケズリが施され、7は底部および外周に手持ちヘラケズリが施されている。6



第164图 H42号住居址出土土器 (1:4)

表63 H42号住居址出土土器観察表

持込番号	類別	器形	数量	残存	成形	調	色調	出土位置	備考
1	須恵器	杯	(12.6) 7.0 3.7	口縁1/5 底部完形	ロクロ	→底部回転糸切り	内面: 5 Y6/1 外面: 5 Y6/1 断面: 5 Y6/1	Ⅱ区1層	火葬あり
2	須恵器	杯	(14.8) (7.0) 3.8	口縁1/10 底部1/3	ロクロ	→底部回転糸切り	内面: 2.5 Y6/1 外面: 2.5 Y6/1 断面: 2.5 Y6/1	Ⅱ区1層	
3	須恵器	杯	(15.2) — (5.4)	口縁1/4	ロクロ	・底部切り離し(切り難し力不明) →高台附付(高台欠損)	内面: N6/0 外面: N4/0 断面: N6/0	Ⅰ区2層	
4	須恵器	甕	(6.0) (2.4)	底部1/2	ロクロ	・底部回転糸切り	内面: 5 Y6/1 外面: 5 Y5/1 断面: 5 Y5/1	Ⅱ区1層	
5	須恵器	甕	17.0 (13.8)	底部3/4	ロクロ	内面: ナゲ 外面: 叩き目→回転ヘラケズリ	内面: 5 YR6/4 外面: 5 YR5/3 断面: 5 YR5/3	Ⅰ区床面	
6	土師器	杯	(13.2) 8.5 3.6	口縁2/3 底部完形	ロクロ	→底部回転糸切り 内面: ヘラミガキ→黒色処理 外面: 底部および外周回転ヘラケズリ	外面: 7.5 YR6/6 断面: 10 YR4/4	Ⅰ区床面	
7	土師器	杯	(14.2) (7.0) 4.1	口縁— 底部1/3	ロクロ	→底部切り離し(切り難し力不明) 内面: ヘラミガキ→黒色処理 外面: 底部および外周回転ヘラケズリ	外面: 7.5 YR5/3 断面: 10 YR4/1	Ⅱ区1層	
8	土師器	甕	(21.8) — (23.6)	口縁3/4	非ロクロ	内面: 口縁ヨコナゲ→胴部ヘラナゲ 外面: 口縁ヨコナゲ→胴部ヘラケズリ	内面: 2.5 YR5/4 外面: 2.5 YR6/4 断面: 2.5 YR5/4	カマド煙道	
9	土師器	甕	21.9 — (11.4)	口縁完形	非ロクロ	内面: 口縁ヨコナゲ→胴部ヘラナゲ 外面: 口縁ヨコナゲ→胴部ヘラケズリ	内面: 7.5 YR6/4 外面: 5 YR5/4 断面: 7.5 YR6/4	カマド煙道	
10	土師器	甕	20.0 — (19.8)	口縁完形	非ロクロ	内面: 胴部ヘラナゲ・口縁ヨコナゲ 外面: 胴部ヘラケズリ→口縁ヨコナゲ	内面: 5 YR4/3 外面: 5 YR5/6 断面: 5 YR5/6	カマド煙道	
11	土師器	甕	(20.0) 4.1 27.5	口縁完形 底部1/2	非ロクロ	内面: 口縁ヨコナゲ→胴部→底部ヘラナゲ 外面: 口縁ヨコナゲ→胴部・底部ヘラケズリ	内面: 5 YR3/3 外面: 5 YR5/3 断面: 5 YR5/3	カマド	
12	土師器	甕	23.2 — (14.1)	口縁1/2	非ロクロ	内面: 口縁ヨコナゲ→胴部ヘラナゲ 外面: 口縁ヨコナゲ→胴部ヘラケズリ	内面: 2.5 YR5/6 外面: 2.5 YR6/6 断面: 2.5 YR6/6	カマド煙道	



第165図 H42号住居址出土土器(1:2)

は住居中央付近の床面、7はⅡ区1層から検出されている。

8~12は、口縁の形状が「コ」の字状の傾向を示し、胴上部が委る土師器長胴甕である。8~10が煙道部に用いられていたものである。また、12も煙道部上面から破片の状態で検出されており、煙道部に用いられた土師器長胴甕の4個目の存在

表64 H42号住居址出土土器観察表

持込番号	器形	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
13	砥石	流紋岩	5.6	2.4	2.0	35	カマド	孔径7mmの穿孔有り

を示唆している。11はカマド内に破片が分布していたものである。

13は上部に穿孔が施され、四面が使用された砥石で、カマド内から出土したものである。

本住居址から検出された土器群は、須恵器杯・土師器杯・土師器長胴甕の特徴と組成から、平安時代前半、九世紀前半の土器様相と考えられよう。

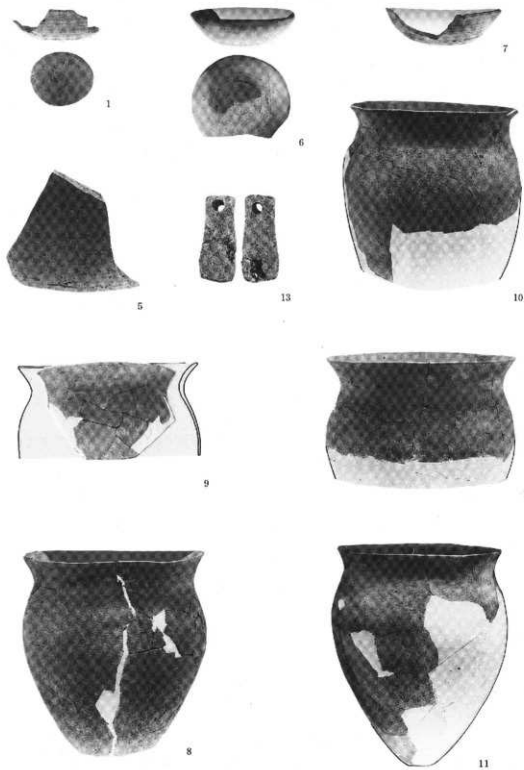


写真160 H42号住居址出土遺物

(40)H43号住居址

平安時代

H43号住居址は、第1区Hけ8・9グリッドより検出された。

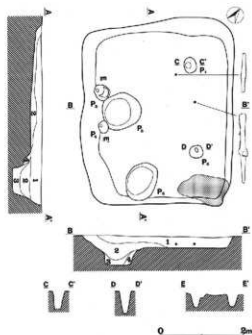
平面形態は、南北4.5m、東西3.7mの南北に長い隅丸方形を呈する。床面積は11.9㎡を測る。

確認面からの壁高は、20cm前後を測る。周溝は存在しない。

ピットは、6個検出された。そのうちP1～P4が柱穴状をなし、P5・P6は土坑状を呈するものである。少なくとも南北に規則的に配置され、同等の掘り方を示しているP1とP2が支柱穴と思われる。P1は38×30cm、深さ43cm、P2は30×32cm、深さ54cmを測る。P3とP4は西壁に接して並存するもので、その前方にP5が位置している。P3は36×40cm、深さ33cm、P4は30×24cm、深さ30cm、P5は86×96cm、深さ38cmを測る。P6は、南壁に接する位置にあり、94×72cm、深さ45cmを測る。

住居覆土は、パミス・ローム粒子を僅かに含む黒褐色土（1層）と、パミス・ローム粒子を僅かに含む黒色土（2層）からなり、P5・P6の覆土にパミス・ローム粒子を多量に含む褐色土（3層）と明黄褐色土（4層）がみられた。

カマド 南東隅に構築されていたことが、粘土



第166図 H43号住居址実測図（1：80）

の分布で把握されたが構造は明確にできなかった。

遺物 1区1層から土師器杯・皿・羽釜、刀子、鉄ノミが検出されている。

本住居址は、南東隅カマド・土師器杯・皿の特徴から、平安時代後半・10世紀以降のものと思われる。

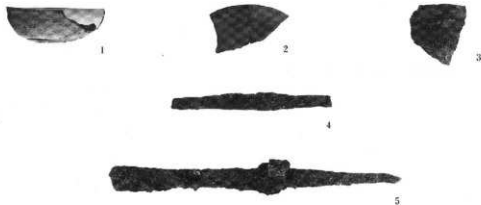
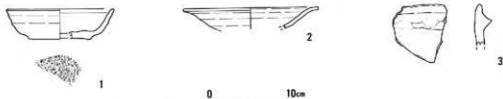


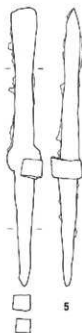
写真161 H43住居址出土遺物



第167図 H43号住居址出土土器(1:4)

表65 H43号住居址出土土器観察表

器名番号	種別	器形	重量	残存	形状	調査	色調	出土位置	備考
1	土器類	杯	(13.2) 7.5 3.7	口縁1/8 底面1/4	ナデ	一底面凹縁糸切り	内面:7.5Y R7/4 外面:7.5Y R7/4 断面:7.5Y R7/4	1区1層	
2	土器類	皿	(16.6) — (2.6)	口縁1/4	ナデ		内面:7.5Y R6/4 外面:7.5Y R6/3 断面:3Y R6/4	1区1層	
3	土器類	羽釜	— —	破片	ナデ	一縁帯粘付 内面:ナデ 外面:ナデ	内面:7.5Y R7/4 外面:10Y R6/2 断面:7.5Y R7/4	1区1層	



0 5cm



写真162 鉄器5の出土状態

表66 H43号住居址出土鉄器観察表

器名番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
4	刀子	鉄	(9.5)	1.2	0.4	(9.6)	1区1層	
5	鉄ノコ	鉄	17.0	2.1	1.0	79.4	1区1層	

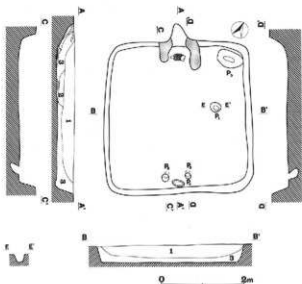
第168図 H43号住居址出土鉄器(1:2)

H44号住居址は、第1区Hお・か7グリッドより検出された。

平面形態は、南北3.7m、東西3.5mの整った隅丸方形を呈する。床面積は11㎡を測る。主軸方向はN-27°-Wを指す。

壁は110度程の傾斜で内湾ぎみに立ち上がる。確認面からの壁高は40cm程度を測る。

ピットは、5個検出されている。南壁中央部に位置するP2～P4は、出入口部施設に関連するものと考えられ、並存するP2・P3は住居内側方向に斜めに穿たれている。P2は18×16cm、深さ22cm、P3は14×14cm、深さ23cmを測る。その中間に位置し、南壁に接するP4は17×30cm、深さ6cmを測る。主柱穴は、西側のピットは検出されなかったが、対をなす2個を想定すると24×25cm、深さ18cmのP1が評価されるか。また、北東隅に位置するP5は40×63cm、深さ15cmを測るものであった。



第169図 H44号住居址実測図（1：80）

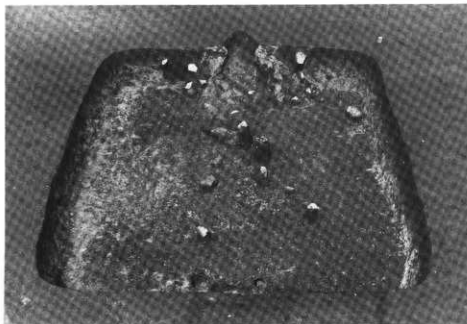


写真163 H44号住居址

住居覆土は、1層がバミス・ロームブロックを多量に含む暗褐色土であり、3層がバミス・ローム粒子を含む黒褐色土である。なお、2層はカマド前方の床面にみられた粘土分布の上面に堆積していたロームブロックの集中部である。

カマド

カマドは北壁中央部に構築されていた。

煙道部は、壁外に掘り込まれた舟先状の緩やかな掘り込みである。

袖部では、構材の黄褐色粘土が一部残存していた。しかし、カマド手前の床面に粘土ブロックの集中的な分布が存在し、さらに、カマド周辺から前方に面取りした軽石が散在していたことから、本来の構築は、石組を芯とし粘土で固められたものと考えられる。

火床面の掘り方には、袖石が埋め込まれていたと考えられ小ビットと楕円形の掘り込みがみられ、褐色土(③層)で埋め戻されていた。また、小形の軽石が並存していたが、支脚石とは確定できなかった。

覆土には、黄褐色粘土ブロックを多量に含む黄褐色土(①層)と黒褐色土(②層)がみられた。

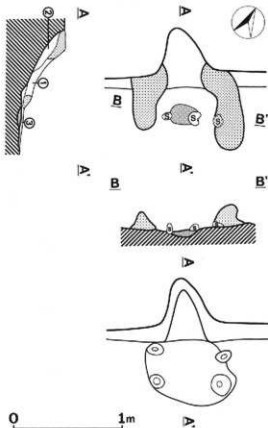
遺物

本住居址の主要遺物は、カマド周辺の床面を主体に検出された須恵器蓋・杯・壺、土師器環である。

1は、つまみ部が宝珠形を呈する須恵器蓋である。カマド手前の床面から検出されている。

2～4は、須恵器環である。3・4の須恵器環は、回転糸切り手法で切り離され、底部に調整が施されていないものである。2は1区の2層から出土したものであり、3はカマド右脇の床面から、4はカマド手前の床面から検出されている。

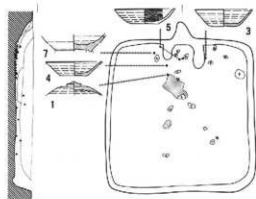
5・6は、ロクロ成形の土師器環である。5はカマド内とカマド左脇の床面に破片が分布していたもので、内面に黒色処理が施されていた。6はB区の2層から検出されたもので、墨書が認められた(ただし、字体は不明である)。



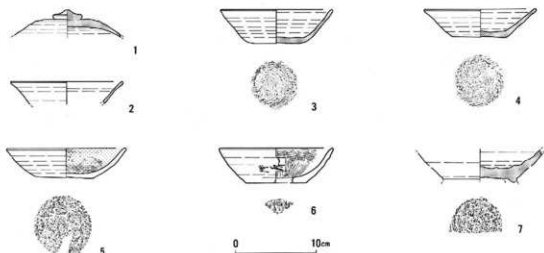
第170図 H44号住居址カマド実測図(1:30)

7は須恵器壺の底部で、カマド左脇の床面から検出されている。

H44号住居址から検出された土器群は、須恵器蓋・須恵器環・土師器環の特徴と組成から、平安時代前半期、九世紀前半の土器様相と考えられ、本住居址の時期を規定しようか。



第171図 H44号住居址遺物分布図



第172図 H44号住居址出土土器(1:4)

表67 H44号住居址出土土器観察表

発掘 番号	種別	形状	法量	保存	成形	図	量	色調	出土位置	備考
1	灰土器	蓋	3.6 (3.4)	つまみ 完形	ワタコ	つまみ紐付 外面:天井部回転ヘラケズリ		内面: N5/0 外面: N3/0 断面: N6/0	I区灰土	火傷あり
2	灰土器	杯	— (2.8)	口縁1/4	ワタコ			内面: N5/0 外面: N7/0 断面: N3/0	I区2層	
3	灰土器	杯	13.8 7.0 4.1	口縁7/8 底部完形	ワタコ	→底部回転糸切り		内面: 10Y6/1 外面: 10Y6/1 断面: 7.5Y6/1	I区灰土	火傷あり
4	灰土器	杯	(13.7) 6.5 3.4	底部完形	ワタコ	→底部回転糸切り		内面: 5Y6/1 外面: N7/0 断面: 2.5Y7/1	I区灰土	
5	土師器	杯	14.7 7.3 3.7	口縁3/4 底部完形	ワタコ	→底部回転糸切り 内面:ヘラケズリ→黒色結露 外面:底部ナゲ		外面: 5YR5/4 断面: 5YR5/4	I区灰土 カマド	
6	土師器	杯	(14.0) (7.4) 4.2	口縁～ 底部1/6	ワタコ	→底部切り離し(切り離し方不明) 外面:底部手持ちヘラケズリ		外面:7.5YR6/3 断面:7.5YR6/3	II区2層	黒青 (字仏不明)
7	灰土器	蓋	(9.3) (4.1)	底部1/2	ワタコ	→底部回転糸切り→高台紐付(高台欠損)		内面: N6/0 外面: 5OY4/1 断面: 10YR6/2	II区灰土	内外面に 自然糖付着

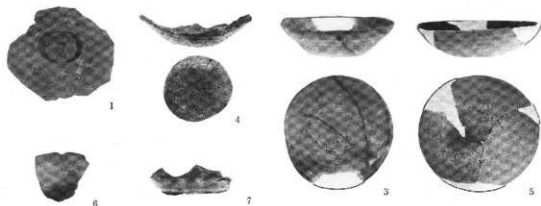


写真164 H44号住居址出土遺物

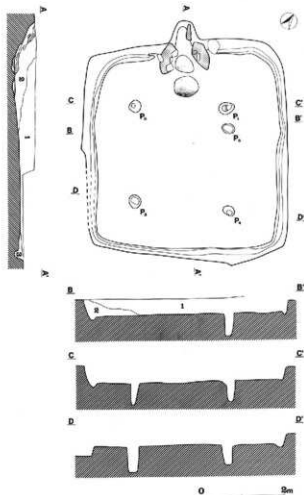
H45号住居址は、第1区Hえ6・7グリッドより検出された。西壁南半と南壁がH46号住居址によって切られている。なお、東壁際は聖原遺跡の調査箇所である。

平面形態は、南北5.3m、東西5.0mの隅丸方形を呈する。床面積は21.9㎡を測る。主軸方向はN-35°-Wを指す。

壁は105°程度の急傾斜で立ち上がり、確認面からの壁高は40cm前後を測る。壁直下に幅8~20cm、深さ2~12cmの断面U字形を呈する周溝が全周する。

支柱穴は、規則的に配された4個(P1~P4)が確認された。また、支柱穴とはほぼ同じ規模を有するP5がP1南脇から検出されている。P1は29×38cm、深さ52cm、P2は30×29cm、深さ53cm、P3は33×30cm、深さ62cm、P4は24×30cm、深さ48cm、P5は23×32cm、深さ54cmを測る。

住居覆土は、周溝の堆積に褐色土(3層)、壁際の堆積にパミス・ローム粒子を多く含む黒褐色土(2層、カマド側では橙色粘土粒子も含む)があり、大半はパミス・ローム粒子を含む暗褐色土(1層)の堆積であった。



第173図 H45号住居址実測図(1:80)



写真165 H45号住居址